
時の記憶

紅い羽

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の記憶

【Nコード】

N6067D

【作者名】

紅い羽

【あらすじ】

俺は夢をよく見る普通の中学三年生。夢をよく見ると言っても、同じ夢ばかり。なにかあるのだろうか。ま、あまり深く考えないようにしよう……。でも、やっぱり気になるな……。

すべての始まりは・・夢（前書き）

あるゲームを基に作ってみた小説です。
冒険物語です。

すべての始まりは・・・夢

「???」・・・何のためにこんな事するの？何の利益も・・・無いはずでしょ・・・」

「???」五月蠅い。負けたお前なんぞがそんな口きいて良いのか？」

「???」くっ・・・兄・・・さん・・・どうして・・・」

兄「この大陸を統一しなければ、この大陸が滅びてしまうのだ」

弟「でも、それがなんで僕を・・・こんな事に・・・」

兄「・・・。お前は・・・戦が嫌いだったから、大陸統一の話を素直に聞き入れてくれるわけない・・・と、思ってたな」

弟「・・・」

兄「・・・情けない兄ですまなかった」

弟「兄・・・さん・・・。言ってくれば・・・よかったのに・・・」

兄「・・・すまない」

弟「ごめん、兄さん。僕・・・先に・・・逝くよ」

フッ・・・

兄「また、どこかで会おう。・・・転生してでもな・・・」

???「・・・弟よ・・・。むにやむにや・・・。」

???「兄さん、起きて、起きてってば!!」

兄「うーん」

弟「おはよう、兄さん」

兄「・・・おはよう、圭哉^{けいや}。いつも早起きだな」

弟（＝圭哉）「兄さんが遅いだけだよ」

兄「・・・。」

二人の母「秀哉^{しゅうざい}、圭哉、早く降りてらっしゃい！」

兄（＝秀哉）&圭哉「はい」

（秀哉視点）そして、俺たちは階段を駆け降りて、朝食をとった。

二人の父「・・・最近、世界のあちこちで人が突然消える現象が起きているらしい・・・。」

二人の母「怖いですね。あなた達も気をつけてね」

圭哉「うん」

秀哉「……」

（秀哉視点）そして、俺たちは学校へとむかった。

いつもの日々の生活が・・・

少年A「よお、圭哉。今日もお兄さんの護衛付きでご登校か？」

少年B「たくましいお兄さんだもんなー」

俺の同学年の男子二名が圭哉にからんでくる。

秀哉「悪いが、そこ、退いてくんねーか？」

俺が睨み付けると、あっさり逃げていった。

いつものことだからあんまり気にしてない。

・・・少なくとも俺の話だが。

いつもどつりの退屈な授業も終わり、いつもどつりに弟と帰っていた。

秀哉「なあ、圭哉、正直言って学校嫌なんじゃねーのか？」

圭哉「・・・。本当は嫌だよ。でも、勉強しなきゃいけない・・・。」

秀哉「やっぱりな」

圭哉「・・・。」

秀哉「そうだ、明日、俺とどっかに遊びに行こうぜ!..!」

圭哉「ダメだよ」

秀哉「良いんだよ。そうだな・・・探検にでも行くか!」

圭哉「・・・うん」

(秀哉)そして翌日。俺は目が覚めた。って、あれ？

秀哉「ここ、何処だああああー!!!」

なんと、俺は目が覚めるとベッドの上ではなく、芝生の上に寝転がっていた。

圭哉「兄さん？」

秀哉「圭哉！お前、その格好は・・・？」

圭哉は、主に赤色で、所々に青色の装飾が施されている長いローブを着ていた。

圭哉「さっき目が覚めたら、こんな風になってたんだ。それより、兄さんの格好・・・」

秀哉「へ？」

ふと、俺が着ている服を見てみると・・・明らかに鎧だ。かなり頑丈そうだ。

秀哉「・・・あれ？」

圭哉「兄さん、どうしたの？」

見覚えがある・・・
どこかで見たことがある・・・
どこかで・・・

夢の町・・・？（前書き）

多少分らないことがあるかと思しますので、詳しくは下の後書きをご覧ください。

よく分かんねーよ」

青年A「うーん、困ったなあ・・・」

圭哉「あ、気にせず続けてください。あとで僕が説明しておきますから」

青年A「ま、いいか。んじゃ、続けるよ、えっと・・・」

青年B「もしかして君らさ、最近行われるって言う剣技大会の選手だったりして」

秀哉「剣・・・技・・・大会？」

圭哉「それに優勝賞金とかって・・・」

青年B「あれ、知らなかった？ 優勝賞金？もちろん、それ目当てで出るヤツもいるぐらいだからな」

圭哉「ちなみにいくらほど・・・」

青年B「確か、去年が五千万セル、その前の年が四千万セル・・・」

青年A「今年は六千万セルぐらいか」

青年B「だろうな」

圭哉「お話、ありがとうございました」

青年A「おうよ、氣い付けてなあ」

秀哉＆圭哉「さよーならー」

秀哉「剣技大会・・・」

圭哉「優勝賞金・・・」

・・・

秀哉＆圭哉「あのさっ」

（秀哉）・・・こういう空気って気持ちい・・・

圭哉「兄さん、お願いがあるんだけど・・・」

秀哉「何？」

圭哉「剣技大会に出て欲しいんだけど・・・」

・・・

秀哉「・・・はあ?! 俺に剣を振り回してくる男どもをぶん殴ってこいつていうのかよ!?!」

圭哉「いや、そこまでは言っていないけど・・・」

秀哉「でも・・・いいぜ」

圭哉「!?! なんてっ? あんなに反抗したのに!?!」

秀哉「そりゃー、弟の頼みだぜー。．．．断れねーだろーが。それに．．．」

圭哉「それに．．．？」

秀哉「ほらっ、あれだよ、あれ！」

圭哉「フフッ、分かった、分かったよ」

いつも兄さんが物事をごまかすときの名ゼリフ「あれだよ、あれ！」

まったくだなあ．．．兄さんは。

秀哉「まったく．．．とりあえず、出りゃいいんだろ、出れば！！」

圭哉「うん、頑張ってね、兄さん！！」

秀哉「んじゃ、出るんだったら参加申込しねーとな」
エントリー

圭哉「剣も探さなくっちゃね」

夢の町・・・？（後書き）

この話の世界の常識

「大陸や領、町」

基本的に、

大陸〓現在の国（例えば日本）

領〓現在の細かな集まり（都道府県）

町（この話に出てくる市や村）〓現在の町

（現在の市や村）

と想像していただければ簡単な と思います。

「セル」

ここではお金の単位。

一セル〓日本円にして一円です。

剣技大会当日（前書き）

ちよつとグロい表現が入っています。
苦手な方はお避け下さい。

剣技大会当日

- 剣技大会当日 -

秀哉「こんなボロそうなんで大丈夫かよ・・・」

俺が持っているのは、昨日町で見つけた格安の剣だ。
大きさ的には普通だが、見た目がいかにもお古って感じた。

圭哉「きつと、何とかなるよ」

秀哉「珍しいな、お前にしてはあやふやな返答の仕方だな」

圭哉「仕方ないよ。この先、何が起こるか分からないからね」

秀哉「・・・ま、確かにそうか」

司会・男「おはようございます！！選手の皆さん、そして、観覧席にいらっしゃる皆さん、スタッフの皆さん」

司会・女「朝早くからお集まりいただきありがとうございます」

（秀哉）ながったらしい・・・

（圭哉）仕方ないでしょ。大会なんだし、人も多いし。整理するだけで大変なんだから

司会・男「とりあえず、簡単に縛^{ルール}の説明をしよう」

司会・女「トーナメント式で、タイマン一対一で行います。対戦相手はくじで決められ、ランダムになります。つまり、運次第」

司会・男「ちなみに大戦中は、バトルちゅう審判の下で行い、ジャッジ縛に反したものはきょうせいりタイア即退場とされる」

司会・男「それじゃあ、1回戦第1試合……」

司会・女「次は1回戦第32試合目……エラコルダさんヴァーサス対シユウヤさんの試合です！！両者は対戦場へ！！」

エラコルダ「よろしく頼むぜえ」

秀哉「こちらこそ」

圭哉「……」

（圭哉）エラコルダって人は、見た目全く日本人じゃないのに言葉が通じてる……
どうしてだろう……

司会・男「両者そろったようです。ではバトルスタート試合開始！！」

秀哉「行くぜ！！」

エラコルダ「かかってこい」

秀哉「おりやつ!!」

グサツ

エラコルダの左肩に秀哉の剣が刺さった

エラコルダ「ぐ・・・」

秀哉「なっ、だ大丈夫か？」

エラコルダ「心配するな。この大会では最先端の医療がそろってる。
むやみやたらに斬られても、心臓と頭をつぶさない
限り、生きられる」

秀哉「!!? マジで!? ……スゲエ」

エラコルダ「・・・と、言っても俺も限界みたいだあ・・・」

ドサツ

エラコルダが倒れた

俺はとっさに肩から剣を引き抜き、鞘に戻した

エラコルダの周りに審判が駆け寄ってくる

審判が何か合図らしきものを送っている

司会・男「エラコルダ選手戦闘不能とみなされ、よってシュウヤ選手
手の勝利!!」

その声とともに体つきががっしりしている大男が二人ぐらい現れた

そしてエラコルダを会場内に連れて行く

（秀哉）・・・ハッ！！　　そういえば俺、この1回戦目勝ったんだよな

圭哉「兄さーん！！早くこっちに降りてきてー！！」

秀哉「お、おう！！」

・・・剣技大会って結構大変だな。
俺的には精神にくるっつーか・・・。
とりあえず、2回戦目、頑張るか。

剣技大会当日（続（前書き））

多少グロイ表現が使われています。
苦手な方はお控え下さい。

剣技大会当日（続）

剣技大会・続

秀哉「よし2回戦目、相手がどんなヤツだろーが絶ってー勝ってやるー!!」

圭哉「いいよ、兄さんそのいき!!」

司会・男「2回戦、28試合目・・・ガリア選手ヴァーサス対シュウヤ選手！
バトルフィールド！対戦場へ!!」

ガリア「へえー、こんなクソガキでも2回戦に出てくるヤツがいるのか・・・が、ここでお終いだぜ、ガキ!!」

秀哉「うつせーな、四の五の言わずにかかってこいや!!」

ガリア「んじゃ、いくぜ」

司会・男「バトルスタート試合開始!!」

ガリア「おうらよつと!!」

ガリアが大きめの剣を大きく縦に振りかぶって、勢いよく振り下ろしてくる

ガアアアアン!!

ものすごい音が会場に鳴り響いた

何とかかわせたものの、飛び散ってくるフィールドのコンクリートが痛い

秀哉「ハア、ハア、なんて力だ・・・」

ガリア「早速息切れか？最近の若者とかいうのは体力がねーな」

秀哉「!？」

今度は横振りで素早く秀哉を襲う

秀哉「があっつ!!」

ズザーーーーッ

勢いよく体がフィールドとすれる音がする
俺はフィールドの端のギリギリで止まった

秀哉「・・・ハア・・・ゼエ・・・ゼエ・・・」

（秀哉）クッソ・・・息すんのが、精一杯だ・・・
何とか、立たねーと・・・

ガッツ

剣をコンクリートに突き刺して、それを支えにして立った

ガリア「ほう、あれをまともに横から受けてまだ立つとは・・・ちい
ったあやるじゃねーか、ガキ」

秀哉「・・・」

ガリア「でも、まともにくらってちゃあ、ド素人同然の雑魚だけだな」

秀哉「・・・（怒）」

ガリア「ん？」

・・・許さねー。あんだけ人を馬鹿にして・・・むかつく・・・
てか、絶つてーぶっ飛ばしてやる

俺は剣を野球のバットののように持ち、剣をバットのように構えた
そしてゆつくり相手^{ガリア}に近寄っていく

ガリア「テメー、何がしてーんだ？野球なら、他のガキとしてこい」

秀哉「くらえ、（名付けて）大かぶりホームランッ！！」

最初の方はぼそつとつぶやくように吐き、技名（即席）は大声で
叫んだ

と、同時に剣をバットのように大きく振る

まるで、野球を始めた頃の素人がやる大振りかのように

ガリア「！？」

一瞬退いたガリアはその場を動けず、腹部に剣が入った
といっても、頑丈な体だけあって切れた傷跡はなかった
出血しなかった

ガリア「痛ってー・・・て、ん？」

いつの間にかガリアの周りに審判がいた
またもや合図を送っている

司会・男「ガリア選手対戦場から落ちてしまったため、敗北決定^{アウト}
よって、勝者はシュウヤ選手！！」

大かぶりホームランの勢いでフィールドから落ちてしまったらしい

・・・ラッキー？・・・うん、ラッキーだな

剣技大会当日（続続（前書き））

どうにも同じ感じの話がだらだらと続いておりますが、こんなものでよければご覧下さい。

剣技大会当日（続続）

第3回戦の俺の相手・・・

ほっそりとした体つきに

顔を覆うフード付きの長いローブのようなマント

常に下を向いていて顔が見えない

身長は少し低い（とは言っても、たぶん俺より高い）

相手「・・・さっさと始めろ」

司会・女「では、バトルスタート試合開始」

どっから来る・・・

3回戦となればかなりの強者が集まってくる

俺はどっちかという運で勝ってきたから

もうそろそろ負けるだろうな

司会・男「両者ともにらみ合って動きません!!」

司会・女「ここでちょっと選手のご紹介をしようと思います」

紹介？そんなモンあったか？

・・・

第3回戦からあつたな・・・

司会・男「まず、液晶ビジョンの方にいる選手がシュウヤ選手!!」

今大会は初出場、年齢は15歳と子供の彼は、運を頼りにここまではい上がってきた!!

しかし、現在行われている第3回戦の相手は・・・」

司会・女「サウエル選手。前回の大会の優勝者であり、前々回の大会では決勝戦で試合放棄をした

あの男！！シユウヤ選手の運もつきたも同然、彼は双剣サウエルをしなやかに扱う

剣の術士だから！！」

秀哉「！？前回の・・・優勝者だって・・・？」

圭哉「どうりで強すぎるはずだよ・・・いくら兄さんが強運の持ち主でも実力差がありすぎる！！」

サウエル「さあ・・・さつさと終いにしてしまおう・・・」

低めの声でゆっくりと話す

サウエル「・・・来ないのか？」

秀哉「・・・お、オリヤアーツ！！」

ガンツ！！

サウエル「・・・鈍い・・・」

スッ

秀哉「！？消えた・・・？」

・・・

ゾクゾクッ

何か背中当たりに寒気が・・・

秀哉が後ろを振り返ってみると・・・

ふわり・・・とんっ

サウエルがゆっくりと片膝をつくように
フィールド
対戦場に立った

秀哉「・・・?!」

何か・・・違和感が・・・

ドスッ・・・

鈍い音が響き渡った

秀哉の腹部に一発殴りのようなものが入ったからだ
何がどう秀哉を殴ったのかがよく分からない
殴られたのは確かだ

秀哉「あんたは・・・一体・・・何者・・・?」

サウエル「俺は・・・」

剣を鞘に収めながらサウエルは言った

サウエル「世界一の双剣使い・・・」

秀哉「ふ、ふざけるなっ、ゴフツゲホツ・・・」

サウエル「騒ぐな・・・」

秀哉「俺はまだ戦闘不能じゃねーのに剣を鞘に収めるなんてっ、ゴホッ」

咳が止まらねえ・・・

くっそお、何がどうなってやがる

サウエル「少年・・・よく覚えておけ・・・剣士が剣を鞘に収めたとき、勝敗がついたと言っことだ・・・と」

秀哉「!？」

目が・・・かすれて・・・

ぼやけてきた・・・

力が・・・はいらねえ・・・

ドサッ

秀哉の体が倒れた

サウエル「これ以上少年を傷つけない・・・彼は意識がないはずだ・・・終わりだ、この試合は・・・」

圭哉「兄さん・・・」

大会終了後

（秀哉）ここは何処だ・・・

蒼い・・・

緩やかに揺れている・・・

居心地が良い・・・

・・・

誰だ・・・

俺を呼んでいるのは・・・

俺はこのままずっと・・・

このままでいたい・・・

呼ぶな・・・

それ以上・・・

秀哉「叫・・・ぶ・・・な・・・」

圭哉「兄さん、兄さん！！」

秀哉「・・・？！圭哉！？お、俺は・・・？」

圭哉「よかった・・・。気がついたみたいで。」

秀哉「圭哉？　何があった？俺はどうしてここに？ここは何処だ？」

圭哉「順を追って説明するよ」

秀哉「ああ。わかりやすく頼む」

圭哉「まず、第3回戦で意識を失った兄さんはこの治療室に運ばれてきたんだ。」

で、約5時間、兄さんは意識を失ってたんだ。

おかげで大会が終わっちゃって・・・。

で、僕が呼びかけてたら兄さんが起きたって事。

分かった？兄さん」

秀哉「ああ。よく分かった（所々嫌みが入ってるのは気のせいだろう）」

サウエル（以下サウ）「意識は戻ったか？少年の兄は」

圭哉「はい。すみません、わざわざこんなに待たせてしまつて。

無理矢理にでもたたき起こせばよかったんですけれど・・・」

秀哉「・・・つておい！！怪我人を無理矢理たたき起こすつてお前！
？何考えて・・・」

圭哉「別に良いじゃない、兄さんは体が丈夫なのが長所だもんね」

秀哉「つつたく、これだからこいつはお調子者なんだよ」

サウ「あまり騒ぐでない。切り傷はないといえども、痛みが走るぞ」

秀哉「痛つ・・・！！」

サウ「いったそばから・・・もう少し横になってじっとしておれ」

とサウエルが言つと秀哉を無理矢理ベッドに押し倒した
そして秀哉の顔に手をかざす

サウ「しばらく眠れ。少年の性格からゆけばじつとしているのは寝
ているときのみのようだからな・・・」

秀哉「う・・・う・・・ん・・・」

くそっ、なんだこれは!!?

まぶたが重たい・・・

視界が・・・ぼやけて・・・

もう・・・限界だ・・・

秀哉「・・・すうー・・・すうー・・・」

圭哉「眠りましたね」

サウ「・・・」

圭哉「・・・」

サウ「これを少年達にあげよう。いろいろと使つがよい」

圭哉「え、あ、はい。ありがとうございます」

ガシャッ!!!

圭哉「がしゃ・・・?」

サウ「優勝賞金の半分ほどだ。少年達のものだ。好きに使え」

圭哉「え、でも、そんなのもらえませんか!!」

サウ「・・・少年の兄の治療代としてならもらっていただけるか？」

圭哉「・・・どうしてもというなら」

サウ「・・・またどこかで会うであろう、そう祈っている。

体には気をつけるよ、少年達・・・」

圭哉「え」

圭哉が振り返ったときにはサウエルの姿はなかった
謎多き人であったサウエルとは別れた。

圭哉「・・・」

圭哉「兄さんの寝顔・・・すごく穏やかな表情をしてて・・・なんだか・・・」

秀哉「・・・ん・・・け・・・い・・・あ・・・
・・・圭・・・哉・・・」

圭哉「兄さん・・・」

ふと下を向いた圭哉の顔には光る何かが流れていた
涙を流していた

そのまま静かに時は過ぎてゆき
気づくと時計の針は8時を指していた
圭哉も疲れていたのか
死んだように眠っていた

大会終了後（後書き）

ま、まだ、主人公（一応、秀哉）は死んでませんよっ！！（まだまだ連載するつもりです）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6067d/>

時の記憶

2011年10月4日19時08分発行